寛政新刻

橘南谿先生著

閑田子蒿蹊先生序

後篇

東遊記

全部五冊

此書ハ橘先生醫学修行の為日本諸國の名所古跡奇談珍説を書集めたるもの寔に其中おのゝうら忠孝貞烈婦女子の事ども最も感涙を催すの類ひ多し人倫の益あるべきものなり刊行を今又復び再刻あらんことを願ふものなり

諸國
午談

東遊記後篇 一

特別
ル3
3983
6

東遊記後編目録

一之巻

○壺井石婦英
○書梧
○盲暦
○葡萄嶺雪こ歩ス

二之巻

○龍燈
○二馬屋
○駿河の名
○新潟
○狐の義理
○三本木竜

IL3
3983
6
<99-1006>

○綿木　○龍鱗
○鮮珠　○養軒ゝ詩

三之巻

○四五六谷　○齋藤五郎左衛
○北極星　○登龍
○黄鐘調　○箒木
○善光寺　○諏訪湖　○嘉吉の変
○熊野御前　○羽州鬼
○松嶋　○舞樂

○漢文帝　○戸隠山
○大魚　○塔景

五之巻

○手取川風雷　○床下の奏
○飛根城跡　○舍利濱
○洞山　○廣徳寺門
○氣候　○名山論
○湫先　○地氣

東遊記後編目録畢

京都帝国大学図書

東遊記後編巻之一

南谿子著

壺碑石碑

名所の壺のいしぶみハ奥州仙臺の東の多賀城の古蹟にあり
即仙臺より松島へ五里筋にして街道より後へ小路丁四拾
間入り込所なり南都の墨屋松井某享保中小石ぶるしの
石と立て壺明白なり往昔坂夷王化に服せ奥州もたまハ
其種類の有ありて性質とかく鋭ひ事なり洛東ハ
平将軍征夷さしとと見て鎮定なるを征夷将軍といい
ひとり居ると然寺府といひ支賀城四達の地にして交通府し
天平寶字六年大野東人といふる人多賀城に後理し此石碑

城建四方の路程記し見雲真人小さしと書しむ今ふるて
八千年ふ餘る古物こはこと字体玄古雅すして庚信ぐ換載
百済ふも新羅し面ろ多賀城修理浚数百年をて秀衡従
ち将軍たろしはを平泉ふ居住して城ハ廃し壷碑を
失ふく孫倉殿の和ふよるひし法名のこはまる毬なう
を世伊達政宗ふ三代目吉村中将の時はを方くと弱水
らしふ今の碑城土中ふ埋もろと云新勾の時ふふと
ろ[illegible]かくこの城今千年の後よもう文字ふ明白をを
石ふしを換ぜして人を見城ハ名ふ事湖ふ思淫のを
碑の体自然石ふ文字と脈ふ方計平こんぐさこう

ろるふ六尺厚ハ計三尺基石ふす外ふ堂あうて見城廃ひ
四方城掘ふして人のこうれふ梅へふ石ふし赤ふ苔ふく
ふ城廃ふるとの中ふ碑の事ハ世上ふ人ふ著
ふる所ふもなくハしくいまるず又或人のひしい壷ハつ
ぶと漢字ふもあるば音悃ふく街中の碑城壷碑し
云と爾雅の注ふもあうと云いぐあくん又東の壷碑と
いうのあう見ハ計多賀城ふハ七八十里計東ふの方塩
の無ふ道地の近在ふ壷村といふふあうこ村ふ壷山とい
山ふうて山ふ石碑あう村民を碑城ふ敬し社と建て
見ふとあう氏神ふして往古ふ[illegible]ふ聞く事なし

碑面文字あり上ノ方ハ大字ニ東くいまゝ成形付ようとゝ
ゝ又ハいろ〳〵のもんヒ民を数して石摺をこふするす
とゆゑ〳〵故ハたる人なし〳〵を年好事の壬此碑拓ら伝へん
こゝと願まゝ極遠方の事成ハ人も稀ハていまゝ世ふ
弘まらず今も彼地城住ものゝ世ハ道盗賊の
ハ法類なし〳〵ハ服をゞて手もと〳〵成ゝ村へもいて〳〵す
今ハ城ゝあり角ゝ城の碑西と云大字あきハ見ハ対する
東の碑ゝゞきゝし又技本系法捕物ハの示ふ云ふゝやハ
ク城のおちふありとき〳〵ゝ兵ゝ世の中城ゝひくゝ成まゝ又
あゆの山系兵ハみちのくハ奥ハ〳〵くもちとゆゆ壹の

ゝふゝゝかの涙風ゝどゝあきハ見ゝるも東の壹碑　ハやと忘ゝる

書語

天地開あ〳〵ゝ今の時ゆゝど太平なる事ハあゝゞ
西ハ鬼界屋玖の島ゝ東ハ奥州の外ゞ海まゝて号今の所
屋ゞ玖ゝ島ゝ往古ハ屋玖國ゝて夷ゝのゆゝふ
中ゝ之奥州も迷ハ蝦夷人の領地なゝ〳〵ふゆ狩をさはまて夷
人の住所あゝ〳〵ゝんゝ〳〵南部津軽道の地名ハ蛮名色
外ゞ演通ゝの村の名ゝも多ツピオロヅキ内ニツ〳〵外ニツ〳〵イ
ベツウテツムなゝいよ所ゝゝ又田名部の名方ゝもヲコベヨ〳〵シ
リヤムゝとゝ外村〳〵在〳〵の名ゝくハ世ゝ〳〵見皆蝦夷視ゝ今

ゆてもウテツすゝの道ハ風俗も甲州夷小ゆゑ津軽の
人と似るハヨゾ極とゝいてい〻やゝむるく余とゝふウテツ道
小湯〻ゞ南部津軽道の村氏も大〻ゝハヨゾ極るべゝ品草く
王化小服〻て風俗言語も改〻る所ゝ先祖より日本人の
〻〻ひゝす居る事とゞ〻ゝる故小禮義文華のゆゝゞ
関けゞゝ尤の事ゝ南部の道郡ふハいろはとゞにゝゝず
〻て育唐とゝのあゝとゞ〻余の通行ゝ〻街道ふハ
あゝ孫ども学〻ゝまゝとゝ〻ゝる又般若心経ゝ〻ゝるぬく
ら唐の法ゝて通ゝ〻ゝゝ云ゝ圏たのゝ〻

育唐

盲心經
メクラシンキヤウ
ん
天
ち
ぢ
王將

王將
王將
王將
王將
王將
天
天

田向

右のごとく拙もとも彼地の方云あつまるゆゑ洛みやこ合点し難きゆゑ注解あり

注解

○東
天 歳徳

○東
辻方向ひて
吉凶不明

節分

彼岸

八専

土用

地火

社日

種下キヨシ

庚申

八十八夜

朔日
正月小 一

朔日
二月大

朔日 五日

九日

十日

十五日

二十日

心經注解

眼心

カワ

般若

孕

田

レン

キヤウ
行人如此ノ如ク云

棺

サイ
鋸ナリ
鋸ヲサイト云

レン
天

尾

九

レキ
麦居

焼麦

フヤカヌ麦

僧

クグミト云草アリ

心經原文

摩訶般若波羅密多心經觀自在菩薩行深般若波羅密多時照見五蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不異色色即是空空即是色受想行識亦復如是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨不増不減是故空中無色無受想行識無眼耳鼻舌身意無色聲香味觸法無眼界乃至無意識界無無明亦無無明盡乃至無老死亦無老死盡無苦集滅道無智亦無得以無所得故菩提薩埵依般若波羅密多故心無罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一切顛倒夢想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅密多故得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅密多是大神呪大明呪是無等等呪能除一切苦真實不虛故説般若波羅密多呪即説呪曰

羯諦羯諦波羅羯諦波羅僧羯諦菩提薩

婆訶
般若心經

右心經の中文字引合をく讀べし見るの事 成田ひて彼
名号の字もいまもてぐる所を南部盛岡の城下より七
八十里を山西あるゝる田山村にいくる拾山中の道
なを誠に古の結縄の約ことの如べし 堀夫坑を見人ふ
文字をく木に刻と付く光年とをとをとを見るの
ゆをとらくへ為をく東國との文華の移ふるゝ事
ふ 九州の山中ゝは彼右いまをとぐる所をく面

時を法時法華山の三首をふまく右所とをく名
ざる事をはをべし 鬼角日本あるゝ所をゝ
菊菊嶺雪に歩ス
天明丙午三月十八日金城後國平林をゝ所城を出
ゝ雪深をゝ武里舎をく村上の城下をゝ出の田原
あをく見ゝ馬沈信ゝん ゝ伝見ゝ雪深ゝ見を
雅ゝとゝの下ゝ沈をゝ三月末の事をゝ
ゝ見ばゝをゝ見の見ゝ見ばゝ雪
石自生なゝ所かくハゝ見ゝ見ゝ見ゝ
形ゝ者ゝ村ゝ里猟沢の路の見所ゝ

そこ〳〵ゝ又まき里塩の所といふ驛まて中食するふそのの
老蘇のつゝまて見こゝゝ先ハ雪ふかく〳〵てなを すくて
行うさし今青ハ山雪ふ有 みくとしてはるの紙と人合を
くいゝぎ日は ふとゝ如くそこゝふ有をよとして老蘇の山家ふと
めひとゝひくいふるべ〳〵はふ天気と晴ゝ山先の葡萄の
澤とハ絶ふ武里の道なまゝ成ハ雪ふ行えべ〳〵と
あぎ岩ひくおゝふ後ふ老蘇ゞ以るゞ〳〵塩の町のお雛
まゝゝ雪はふ浄く山川道迄見一面の白雪まて村雛ま
ま道計りハ人の行ふ見ひ〳〵沿とありて同ゞまゝ〳〵ゞ
北まゝゝゝえきハ左筋まワれゞ方角とゝ考ひて行ぐ

こゝまんとまゝゝゝ遣ひ行ふれ〳〵ハ雪と踏めさて川の中へ
落入り掘けゝも雪の中ふあゝ或ハ切り岩ふの西ふ行かゝゝ
雪為まゝ成ゝ浄きゝ〳〵ゝ区なゝて荒れゝと雪ふ動け
合ゝ岩筋の手ゝ為成ゝ行程ゝ谷川
池澤ゝ中ゝ田ゝなゝの中ゝ落入りて西側ゝ車数十度ふ及
ゝゝまゝゝゝ掘雪ゝ深けまゝ川のゝゝいゝゝと方法
全く落入る事なゝ〳〵かゝゝふ事方苦ゝて後ふ武里の湯と
当月かゝゝと月雪ふ為ゝゝゝく葡萄の強ふゝゝゝ成ゝ
後ゝゝ老蘇の親ふ後ひ塩の町ふ一布ゝふ為の西ゝゝ
ゝゝふ常内共成ゝひく来ゝゝ成ゝ成ゝ成ゝ

ようと法師一なるう先ゑ悪うして付くと炬の湯と薄
うい粉ふあくうり宇氣と防ぐふ長くうり血の流ゑくお撃る紀
どんハ今月度て諸ぬさ高入り財麻付ようーが二ゑ所
ハ血を通くりうびて痛くとを笑ええぐまーが今湯ふ入り
少ふあくあく神くく血のわ赤ひうさ麻の痕今雪
くおまう和氏夜法いくゑて不今日のおぐにかくのでー
ぬうの道ゑうふ杉ふ蛭ゑ一の雪乗ひ
ばいうある雑俵まうのぐん長草天雪陣く雪さうふ兎角
者祇やとふ紙ゑべーとまーく十九るすぐ船ゑて
ぬうう立ふ無角を先ふ立道ゑいとぐ強ふ吹メーふ湯り

て教丈の候雪山ハ白祇ようて他まるでくく樹あも尺沢
ひうとであ角ハ太ゑ色ハ乃ゑたどくーうず雪と伝うく
義ゑうの色ゑとぬくーて強ふ頂ふむうひ汗ふ兎伏ぬ
神ゑて神祠あう此ふゑ山乃張ゑうゑ雪ゑゆ
すくぬくえゆ神祠の浸ロふ出巌穴あ里ぬ仲の伝ゆふ
なうゑくく山農穴のゑ乃方ゑまるさ強強あく巌ゑ
高サ二十丈餘ゑうゑ山巌ゑ道ふ古木の杉数十年
ゑうふ杉の指ゆうく光の雪ふ乃ゑ出ゑ山ゑ流ふ唐
画ゑうるでくく弁施ひれゑ方ゑ雪ハ一ゑうゑ流ゑ宮
氣流ゆうふーゑうゑ中村中次荒川小股小渦おの付く

松堂藤雅則写

ばかりなる小僧雪もあさをとりはかのどうるがつと掃きまる雪を行先いよく急く敷丈小餅ほうれ村く小て車曳せるひ行小屋ほうる法よう吾又ゆ〜ゆるこ和階めけく蔵入ら年明るのでゝ拙尾ほといふ和のおふくたるる詩と小ぞう美ろうるる和ろう志論沮すして下ふきぬなゝ車内の者と行きの筋とひらんとたゝふうち雪ふとぐらて道の谷間へ蔵ば余ら和ふ落きて歩ろうゞ国体とひとく車曳の人のあるかうこそあゝし雪おゝゝゆちゝふるゝふれハきとゞ城湯はて弱ふひゝハ行事うたうんといひくそゝ面、

ばかりなる小雪ふ堤ばゆる本乃稍へ蔵かゆくゝ通ちゝ車ふ小雪ふ堤ばゆる本乃稍へ蔵かゆくゝ通ちゝ車ふ稍とめけおまで程下の谷数百伺の切崖とりべきゆうゝ巳まで又ふまて蔵たるるなしい居ろ登ろんるハ程ちゝるいいぐもんとちゝうち力学ふ拙居ちゝゝ本の稍ちまゝゝゆうもやいる又吾のとちぐう蔵るふ中程ろハ前の方道拙ふ和ろう蔵て行く余ら稍ふかゝを居ちる間ゝ岩形ハ早ちんふ蔵ちゝふしてちちゝ人蔵まゝうちゝ居ちゝ吾ふけぐるゝゝちふ和ゝゝ見ゝ通ぬまハ岩形とちとゑ

今とこの方にはさんるる雪山頭のとふかひまで
今やそのふしの高て金銀うーなりんりとらんぶ品ろーく
鳥とつゞあくび又さ逢坂小ぢぐ高ふ西国の若狭を
只雲のごとくふ高はてう谷狭まくいよくこの高ろる
ゆうふ芝ゆきいふナダレの高ろーく何とぞ雪もまく
のゞまこあんとさまあく若狭銀さう幼小谷の狭い谷川流き
て岩むは只の下ふ雪を流くく岩手波の書籍をひきこ雪西
雪銀諸ぬさ谷川（高ろん車をおとゞ様ーをらどとしまう
も只ーとまナダレのあるん車危面れ〻お後とろう見ろ
人とゆふばるくふあるふ只者ふもーも十丁程て雪ろう

出くゆるくく高ーく人出ッ川音とゆ雪をぞう先金とゆろひーん
地ーくく若ーはくーふひ雪そ溜之人一和とあう雪を恵おうう
と怪びぬまう怪ぬく屋雪といふ雪付く雪銀くる和高付て
後あ人雪に新とんるに雪色土のくくふく新樓もいまく新
なくに後ふ今日のいやう紀事申くまふは書尽雪ぞきふあ
らず金銀保てるい見物天脚ともいつべーー越ろ書雪ふは十タ
とくいるのあう又アワとくふるのあるくく年ーく人の接するの
いいはといいて冬ーーなゞ高い三四月の付ふあるいのいとい
雪高雪中降時ふふ山とこの本の積ろう高泡二ふ高るくくさを
アワ限くふろの高るふ浜ひ雪まうーとするぞくく次第ふ大

小あり禁小ゑ[illegible]ハ大石のごとく小あつて落ち見ゆる
そのハ大あと根こぎ小あり[illegible]時ハ人ゑ
とふらけさこそふいと西あるぞみぢん小砕かるゝ
といふは春の末小あり地中ゟ湯氣あり小俗ひ物丈接る
雪のしたゟ西ゟみ竹く山とゝゟナダと落る小ゑ強ひ小動ら
されくゝ迫の雪一回小崩き落く川と谷と埋むゆく人
るの郷ゟ又人参ゟ小ゝなぐき落る事あるとゝ見ふゝ
る者即死をるのゝなゝゞ数十丈の雪小埋すきて雪屋で
すこハ知る人ゝなゝゝ山ニワハ小花の人乃ゟるゝゟ[illegible]ハ[illegible]
小ゝ居ゝゟゝゞ今日の気まひゝゟひゝゟ肝ゝゆるん花す

扨ハ宿の主小ハ先ゝ雪ゟ[illegible]ゟ山先小木股振美
川などいふ所ハ小嶮阻ゝて雪と雪と源ゝと云扨ハいゞぐもんハ
小嶮阻ゝて雪と又源ゝと云扨ハいゞぐもんハ
すぐ迫ゟ迫ゟもんやゟどゟくゟひゝゟ亭ゝ亭小ゟゟ
亭ゝ亭乃いふハ見ゟゟ北小岩川といふ小あり見ゝ
間道あり見ハ海ゟ亭ゝてゟ見ゟ見ゟ
ゟ仆雪の中なり抑此葡萄ハ羽越の界小て山の石ゟ
雪中ゟゝ四時ゟ猿人の経伝ゟ小ゝ此葡萄盗
ゟゝ猿人あゝゝ殺害ゝ今ゟ仕来の人ゟ所也

東遊記後編巻之一